イデアール

都筑遥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
イデアール

【Ｎコード】
Ｎ８８６５Ｗ

【作者名】
都筑遥

【あらすじ】
大国ヒルディアとシルギードに挟まれた無武装商業都市・カラム。両国の関係が悪化し、領主家族が失踪した事により勘当同然に追い出されていた義理の息子・ヴァースへとその地位が押しつけられる事になった。
自治を守るための盾にされたヴァースが選ぶ道とは――
主人公男女問わずのアイドル属性。実力よりカリスマで戦うお話です。

プロローグ

コン、コン。
滅多に――というよりもまず人など訪れる事もないであろう、森の外れの掘っ立て小屋。見よう見真似、手探りでヴァースが作っただけの物だったから倒れないだけ上等だという、そんなレベルの代物だ。
その戸を叩く、規則正しいノックの音。
（何だ？）
来客などヴァースがここに移ってから初めてだった。勿論予定も無い。
（迷ったとか？）
こんな金も何も無さそうな小屋に物取りは無いだろう。町までは少々遠いから迷い込んでしまった誰かかもしれない。
そんな事を考えているうちに、二回目のノック。
道案内をするだけならそう時間もかからない。それより去る気配のないノックの方が鬱陶しい。
万一にでも押し入られるのも面倒だ。
鍵代わりのつっかえ棒を外し、扉を開く。そこに立っていたのは女だった。
「ヴァース・ファウストフィート様ですね」
ぴしりと隙無く背筋を伸ばした彼女に相応しい、凛とした声音。淡い紫の髪を頭の後ろで一本に纏めただけの簡単なスタイル。黒に近い濃藍の瞳が予想外の来訪者に呆けているヴァースに逸らされる事無く注がれている。
真っ直ぐ見られるだけで女性の眼には力がある。慣れていないせいもあるがヴァースはそれが少々苦手で自分から少し視線を逸らした。
「シア・ミディアラと申します。貴方のお義父上であるリカルド・ファウストフィート公が失踪致しましたのでお迎えに上がりました。

私と共にカラムに戻り、ファウストフィート公爵を継いで下さいませ」
「――は、ァ？」
唖然とした声を上げ、内容を一拍遅れて理解してから扉を開けてしまった事を激しく後悔した。
「冗談じゃねえ。大体俺にファウストフィートの血は流れてねえしとっくに縁切りしたも同然だ。その俺が何で領主なんか」
「されたも同然と実際に縁切りされたのとでは天と地程違います。ファウストフィートの名を持つのは貴方だけなのです。否と仰るなら実力で連れて行かせて頂きます」
シアの目は本気だった。腰に佩いた剣に手を掛け次のヴァースの言葉次第ですぐさま実行できるようにスタンバイしている。
「私と共に、カラムにお出で下さい」
「……脅しだろうが……」
ヴァース自身、幼い頃は教養の一端として武術を嗜んだ事がある。無力な自分というものが嫌いだったから、我流で今も続けている。――だから何となく判る。彼女は自分よりも強い。加えてこちらは丸腰だ。
「……行きゃあいいんだろ」
「はい」
「継いでも何もしねえぞ」
「結構です。貴方は領主としていて下さればそれでいい」
それでも正直、御免だった。だが痛い思いをして連行されるのも馬鹿馬鹿しい。
「判った。さっさと行くぞ」
「宜しいのですか？　準備するぐらいは待ちますけれども」
「見ての通り、盗って価値のあるものは何もねえよ。――それに、長く空ける気もねえ」
「……では、参りましょう」
就く前からの辞任宣言はさらりと無視してシアはヴァースを促し

彼の治める事となる町へと向かった。
国境の自由都市、カラムへ。

第一章　自由都市カラム

「――……っ……」

カーテン越しに差し込む朝日に、ヴァースはまだうとうとしながら寝返りを打つ。このルベルリア大陸には存在しない金髪が陽光を弾いてちらちらと輝いた。

一回起きてしまうともう眠気はどんどん失せて行き、諦めてのそりと上半身を起こす。

「……朝か」

この一月強、怠惰になろうとすればいくらでも出来る生活を今のヴァースは送っていた。

シアに連れられて来たカラムで滞りなくファウストフィート公爵の名を継ぎ、領主館で過ごしている。

無論、領主の仕事がそう暇な訳はない。本来ヴァースがやるべき仕事の殆どをシアがこなし、どうしても直筆のサインが必要な書面だけが回されて来るのだ。お陰でヴァースは一ヶ月経った今もカラムの事を何も知らない。

かなりハードな日々を送っているらしいが、知った事ではなかった。

（それぐらいしてもらわねえとな）

何しろこんな面倒な町に自分を連れて来たのだ。それぐらいやって貰わなくては困る。

自由都市の名を持つここ、カラムはどこの国にも属さない土地だ。

その歴史は決して古くはなく、数十年前、大陸随一の大国であるヒルディアと新進軍事国家であるシルギードが長き戦争に自国の国力弱化に懸念を覚え、停戦を結んだ時から始まった。

どこの物でもない土地を国境とし、その間の都市を軍事・政治介入一切禁止の自治区として作り上げたのである。

作られた理由はとても誇れるものではなかったが、何しろ大国に挟まれているという立地の都合上流通の便も良く、また武力による圧

力から大陸全体で守られたその都市が発展するのにそう時間は掛からなかった。
優れた芸術品や知識の宝庫、そして財産――
最早自治区にしておくのは勿体ない富の町と化していた。
しかし大陸全体でこのカラムへの政治、軍事干渉が禁じられている以上、これ程の旨味のある都市にも理由なく手出しは出来なかった。
領主ファウストフィート公の失踪が起こるまでは。
ファウストフィート公リカルドとその息子は失踪し、カラムの領主の座は空席となった。そこで遥かに遠い親戚筋だという者が名乗りを上げてきた。
ヒルディアと、シルギード両国から。
（機会があんなら金は幾らあってもいい）
ファウストフィート公が失踪したのも両国からの圧力――はっきり言ってしまえば暗殺を恐れ、耐えられなくなったからだという話が有力だ。
そうだろうとヴァースも納得した。身命を賭して町を守ろうなどという人間ではなかった、彼等は。
空席のままではヒルディアにしろシルギードにしろ、その干渉を突っぱねられない。そこで白羽の矢が立ったのが間違いなくどことも関係のないヴァースだった、という訳である。
一応ヴァースの母は正室だったので、連れ子であったヴァースも一緒にファウストフィートの名をもらっている。母がどうしてもとヴァースを手放すのを拒んだおかげだ。
本当の所は血が繋がっているかどうか定かではないような遠縁筋よりはまだ近しい。それに何より、市民達は絶大な声でヴァースを望んだ。それを押してまで他国からの干渉で排斥は出来なかったのだ。
ファウストフィートの名前を持っていてくれるだけでいい――シアの言葉はそういう意味だ。
ぼんやりと町の中央に建てられた城から町を眺めていると、静かに扉がノックされた。

「シアです。宜しいですか」
「ああ」
「失礼します」
扉を開けて入ってきたシアの手には薄く纏められた書類の束。おそらく今日はこれで終わりだろう。
「サインをお願い致します。明日取りに伺いますので」
「判った」
「有難うございます。それでは」
すいと頭を下げ、早々にシアは踵を返した。ヴァースがファウストフィートを継いで一ヶ月強、彼女との会話は常にこんな感じだ。それは全く構わない。むしろヴァースの方が面倒がってそうしたと言っていい。シアにしてみればヴァースにやる気があるに越した事はないので始めはそれなりに町の事なども聞かされたのだが、関心を向けなかったヴァースに尚もそれを要求したりはしなかった。だから普段ならこれで終わり――なのだが、ふと思いついた疑問を彼女に向けてみた。
「なぁ」
「はい？」
ヴァースから呼び止められた事に少々驚きつつ、シアは足を止めて振り返った。
「何であんたはファウストフィートに拘るんだ。確かにヒルディアなりシルギードなりを受け入れりゃゆくゆくは統合されるかも知んねえ。間違いなく便宜は図る様になるだろうさ。だがあいつ等が欲しいのはこの町の利だ。支配者が変わったって別に何も変わりゃしねえよ」
「いいえ。どこかの属領になった時点でもう自由ではありません。この町が自由なのはどこの物でもないからなのです。それにこの町が不可侵領域である事でどれだけの人が安寧を得ているか知っていますか？」
「……」

国力の衰えを理由に停戦してから数十年。決して短い年月ではない。それこそ国力を再び回復できる程度に。
間にカラムが存在するが故にお互い進軍が出来ない。それもヒルディアやシルギードがカラムを厭う理由の一つだ。
そして属領となり、戦が再発した日には真っ先に戦場となるのがここ、カラムだ。
「ここは私の、今まで住んできた町です。その大切な場所を、人を、守りたいと思うのが不思議な事ですか？」
「……俺は場所にも人にも執着はない」
「そうでしたね。けれども貴方はここにファウストフィートの名を持って居て下さっている。それで私には充分です」
シアは始めからヴァースに期待という事をしていない。勿論御免だ、ただでさえ面倒だというのに。
「では、失礼します」
そう言って去ったシアを、今度は呼び止めはしなかった。すっきりはしなかったが納得できる理由も貰って、用は済んだ。
（守りたい物を守るには力が要る）
力がなければ理不尽な強者に弱者は踏み付けられるだけ。それは避けようのない事実だ。今のカラムと同じく。
しかしそんな事、他人のヴァースが言うまでも無く住民皆が判っているだろう。だからこそヴァースを風除けに欲したのだから。
正直、風除けの盾など御免である。――だが、彼等は必死だ。
ヴァースが少しぐらい、付き合ってもいいかと思うぐらいには。
場所にも人にも思い入れの無いヴァースではあるが、その必死さには覚えがある。どうしても守りたいものの為に、必死に足掻くその姿。
「どうせどうにもなりゃしない」
この戦いに勝ちはない。何故ならどう足掻いても結局カラムに力がないからだ。
このまま領主の座に居座り続ければそのうち自分は殺されるだろう。

自分一人の人生だ。楽に殺してくれるならそれもいい。
「……」
シアが置いていった薄い書類の束に手を伸ばし――しかし気分にならずに手を落とし、だらだらと入ったままだったベッドから起き上がり窓から町を見下ろした。
自分の立場を考えればあまり賢いとは言えないのだが、鬱々とした気分に勝てずヴァースは城の外へと足を向けた。

1―2

カラム領民は基本的にヴァースに対して好意的である。自分達の町を守る為の必要な盾だ、当然と言える。
（そうじゃなきゃ、こんな目立つナリで外出やしねーけどな）
買ったリンゴの値段もおまけしてもらって、歩きながらかぶりつく。擦れ違った人全員が必ず足を止め振り返り、その一挙手一投足を見られるのは鬱陶しいが子供の頃からそれは同じだ。もう慣れた。
「――？」
表通りから裏通りへと続く脇道に通り掛かった時、ガシャンという物の壊れる穏やかでない音を聞いた。続いて多くはないが、複数人の足音。
きっと関わり合いにならない方が良い物騒な事態だろう。――どうするか。
一瞬迷ったが、ヴァースは裏路地へと足を向ける事にした。
もし女だったら後で知ってしまった時寝覚めが悪い。それだけだった。
音を頼りに現場を探し当てる。そう奥まった所でもなくすぐに見付かった。
（何だ）
しかしその光景を見てヴァースはさっさと踵を返そうとする。一対二と、思っていたより人数は少なかったが光景自体は思っていた通りの代物。ただし襲われているのは旅人風の少年だった。ヴァースよりも若干年下、だろうか。
これが町の一市民であるならばまた話は別だが、旅人――それも今緊張状態にあるカラム周辺に来るのなら予め防衛策を持って然るべきである。
避けられる面倒は避けなかった方が悪い。
そうやや冷ややかな感想をヴァースは下す。

幸い相手にはまだ気付かれていない。だが引き返そうとしたヴァースの姿を少年の方が捉えてしまった。
続いて自分達の背後に焦点を合わせた少年の眼に男達も気が付いてしまう。
「何だテメェ！」
振り返った先に居たヴァースをそう怒鳴りつけ顎をしゃくって、たった今ヴァースが引き返そうとしていた路地を示す。
「見せもんじゃねえ、さっさと失せ――」
「おい、待て」
追い返そうとした男の仲間が肩を掴んで言葉を止めた。
「こいつ、ファウストフィート公のヴァース様じゃねえか？」
「……本当だ。本当に金髪紫眼かよ。こんな所にフラフラ出歩くたァ、金のある奴ってなァ賢くねえなぁ、おい」
「丁度良い。こいつも一緒に捕まえちまおうぜ。ヒルディアでもシルギードでもきっと高く買い――がはっ！」
突っ立ったままだった自分に伸ばされた手を払い、間髪入れず男の顎を蹴り上げた。金属で補強された靴、更に男の力で蹴れば、かなりの威力だ。
髪や眼と同じくヴァースの色素は若干薄く肌も白い。ややきついが整った顔立ちと相まって体を鍛えているとは――ましてこう攻撃的だとは思っていなかったのだろう。
「気安く触んな。売り物じゃねえんだよ」
買う・売るという単語はヴァースの中ではタブーだ。髪と眼が珍しいというだけで母と共にそういう目に遭い掛けた事は少なくない。地面に転がってのたうつ男の頭を容赦無く踏み付け、残ったもう一人を睨み付ける。
「テメェはどうする」
「ひ……っ！」
恐れ、戦いた声を上げると男は足を縺れさせながら逃げ出した。踏み付けていた男から足を退かすと、そちらも戦意など最早欠片も

無く相方の後を追って逃げて行く。
「助かりました。有難うございます」
「別に助けた訳じゃねえ」
服を叩いて立ち上がった少年からの礼にヴァースは素っ気なく答えた。彼はヴァースが引き返そうとしたのを見ていたはずだ。彼を助ける事になったのはヴァース自身が絡まれたからに他ならない。
「判ってます。でも助かった事は助かったんで」
微かにそのワインレッドの眼を細めて彼は楽しそうに笑った。本当にそう思っているのかどうか判らない程少年の態度は余裕だ。年若くまだ十代の半ば程に見えるのだが、荒事に慣れているのかもしれない。
「折角お会いしたんで、ついでに一つ、聞いて良いですか」
「何だ」
「どうしてファウストフィートを継いだんでえすか？」
「継がされたんだよ」
心外だ、と口にはせずにそう吐き捨てると少年は苦笑して頷いた。
「そうですね。形としては。でも逃げる事ならいつでも出来るんじゃないですか？　腕も立つようだし、こんな所をフラフラしているぐらいですから」
確かにそうだが、今の所ヴァースに逃げるつもりはない。彼が聞きたいのは継いで、その椅子に座り続けている理由の方だろうか。
「故郷だなんて言った所で貴方には大した思い入れも無いでしょう」
「……」
ヴァースの出生はカラムやその周辺ではすでに知れ渡っている。だから知っている事自体はおかしくはない。
――ただ、やはり半ば縁切りされた状態から領主に就いたなどと聞こえの良い話ではないし町の人間は基本ヴァースの不利になるような話はしない。
なので耳に入れようとしなければ入らないぐらいの話ではあるのだ。そんな話を通過するのに立ち寄っただけであろう旅人が何故気にし

ているのか。
「なのに何故、こんな所に居るんですか？」
「……必死だからだ」
別に答えてどうなる内容でもなかった。
命を懸けるには安すぎると、そう信じないかと思ったのだがヴァースの答えに少年は微かに目を見開き、それからおもむろに自分の耳に飾られていたカフスを外してヴァースの耳へと着け直した。
「テメェ！　何す」
見ず知らずの他人から物を受け取る程警戒心は薄くない。まして身に着けるなど妙な呪いでも掛かっていたらと思うとぞっとする。
（……何もない、みたいだな）
「呪いじゃありませんよ。俺はちょっと貴方が気に入りました。フアウストフィート公」
「はァ？」
「それは差し上げます。貴方の立場ならきっと役に立つと思うので」
「――おいっ？」
一体何であるかの説明も無いまま去って行こうとした彼の肩を掴んだ手がするりと手応え無く通り抜けた。
「――ッ！」
ぞわっと一気に鳥肌が立ったが、顔を上げたヴァースの眼に霧状に散った魔力の流れと遥か遠くに少年の背中が見えた。
（何……？）
世に満ちる魔力の流れというものを見る事の出来る技術は魔術の中に確かにあるが、高位魔術に分類される代物だ。勿論教養程度の嗜みしかないヴァースに使える代物ではない。
まさかと思って着けられたカフスを外すと、綺麗さっぱり見えなくなった。
「これか……」
高位魔術を付加した魔道具となれば相当に高価な代物――というよりも、おそらく値段は付けられない。何しろ創り手が限られる。

手に取って見たそれは細工も精緻で美しく、装飾品としても申し分なかった。
（何者だあのガキ）
少しばかり躊躇った後、ヴァースは再び耳に付け直した。確かにこれは役に立ってくれるだろう。
すっかり静かになった路地を後にして表通りに戻ると、たった今飛び込もうとしていたシアとばったりかち合った。
「あ」
「ファウストフィート公ッ。何をしているのですかっ」
口を開くなりのその言葉にヴァースは面倒そうに後ろ頭を掻く。女の怒鳴り声は苦手だ。
「見りゃ判るだろ。息抜きに外出ただけだ」
「息抜き……っ。あっ、貴方はご自分の状況が判っているのですかっ！」
「一応判ってると思うけどな」
冷めた口調でそう言われ、シアの方が気遅れて押し黙った。ただその名前を持つだけで命を懸けさせてしまっている事への後ろめたさは感じているらしい。
「で……っ、でしたら、不用意に外出なさるのはお控え下さい」
「ずっと城の中じゃ息が詰まる」
「ならばせめて共をお連れ下さいっ」
「他人と一緒で息抜きになるか」
「――っ。貴方は自分の命が惜しくはないのですかっ」
危機感、というものが欠如したヴァースの言い様に思わずシアの方が声を荒げる。しかし振り向いたヴァースの眼は酷く冷めきっていて、唇は皮肉気な笑いを作ってさえいた。
「別に。苦しまなくていいならそれでいい。だがあんたはそういう俺の精神性に感謝していいはずだぜ」
「それは……ッ」
たじろき、息を詰めた後でシアは目線を逸らして頷いた。

「――ええ、そうです。だからこそ私は貴方を失う訳にはいきません。お判りでしょう」
「判ってる。まァなるべく気を付けるさ」
多少腕が立とうとも、一対多数になればどうにもならない。ましてヴァースは達人や一流といった部類で判断するとそう強くはないのだ。
「……戻りましょう、ファウストフィート公。息抜きと仰るならもう十分なはず」
「あぁ、そうだな」
頷き、先に立ったシアについて歩き出す。
（どうでもいいんだ、別に）
自分の事だというのに酷く無気力だとは自分でも思う。しかしそれもどうでもいい。
世の中と真っ正直に向き合っていたら自分が疲れるだけなのだから。

1―3

ザワ、と葉擦れの音に反応して目を向けて、ヴァースはパタリと読んでいた本を閉じた。
夜もすっかり更けてしまってそろそろ寝ようと思っていたから丁度きりは良かった。気分は冴えないが。
「判ってるぞ。ばれてるなら隠れてる意味はねえだろ」
葉擦れのした方向に気配を頼りに――ではなく、ややずれた角度に向けてヴァースはそう声を掛けた。
立て掛けてあった剣を鞘から引き抜き真っ直ぐそちらを見ていると、ヴァースが当てずっぽうで言っているのではないのを認め、ククと喉で笑った声を共に男が窓から姿を見せた。
年齢は二十の半ばから少し上、恐らく三十路には届いていまい。装いは白のコートと黒のインナーの二層。そしてダークグリーンの腰まで届く長髪と、夜目にも目立つ出で立ちだ。
にも拘らず男は今の今まで周囲と同化し姿を消していた。――幻術だ。
「よく判ったな。そう魔術適性が高いとも思えないんだが」
不意打ちに失敗したというのに、男はむしろ楽しそうだった。
「一応聞いておくが……物盗り、じゃねえだろ」
「あァ、勿論。人探しついでの仕事だ！」
男の足が一歩緩やかに前進した――次の瞬間、ヴァースは男の姿を見失った。沸き起こった寒気と本能に従い身を捻って剣を首の辺りに持ち上げる。
「っ！」
ギィン、という金属同士のぶつかるような高い音を立て、しかしヴァースの眼に映ったのは刃と鍔競合う人間の手刀だった。
正確には生身ではない。手刀の周りに研がれた風の刃が纏わりつき、それが金属の刃と拮抗しているのだ。

「見えてるか？　中々だぞ！」
「がッ！」
間髪入れず蹴り飛ばされ、受け身など取る間もなく床を転がる。
それでも眼は襲撃者から逸らさなかった。
手に纏わせた風の刃を維持し、ヴァースへと走り込みながら更に彼はもう一つの魔術を構築し始めている。
普通に考えて、一つ一つが高い集中力を必要とする魔術を二つ同時に発動させながら、更に相手に斬りかかってくるなど有り得ない。
だが今現在男はそれを成し、放とうと構築されていく魔力の奔流に一切の乱れも無い。確実に発動させてくる。
「リンデンバウムだ！　殺す前に名を名乗るのは久し振りだぞ！」
喜々として瞳に凶悪な光を宿し振り降ろされるリンデンバウムの風の手刀を何とか避け、あるいは弾く。彼の動きについていけてる訳ではない。
どんな形であれ魔術を使えばそこに不自然な流れが出来る。リンデンバウムの意思に確実に沿って動くので来る場所を視て動いているだけだ。
しかし、それで何とか防御できている程度。素で戦っていたら一番初めの幻術に気付かず殺されている。
（ヤバい）
彼の振るう手刀を捌くので精一杯だ。もう魔術が構築され終わる。
その魔術そのものを知っていれば名前も判るであろう程にはっきり視える。凝縮された魔力量から見て相当に広範囲かつ、威力もある代物だろう。
間に合うか防げるか、両方とも判らないがとにかく盾を作って凌ぐしかない。
驚異的なスペックで戦っているリンデンバウムもやはり人間ではあるらしい。発動前になって意識が魔術の方へと向いたか若干斬り合いの手が緩くなる。――それもヴァースの眼が魔力を見ているからそれと判った程度の変化だが。

「――うん？」
ヴァースが防御の為の魔術を構築し始めた途端、リンデンバウムは訝しげに呟き眉を寄せ、後は名を呼ぶだけだった魔術を惜しげも無く四散させた。
「っ？」
平然と行っていた高位魔術の無言構築だがやはり影響は大きかったのだ。解いた途端に変わったリンデンバウムの動きを見失って、まともに間合いに踏み込まれ掌底をくらう。
速くなったとかそういう類ではない。直線的だった動きに慣れた目が純粋に彼本来の体捌きに対応出来なかっただけだ。
「が……ッ」
掌底を打つ前に風の魔術も解除されていて、力の手加減もされていた。意識を失わせないためだ。
「どういう事だ？」
言いながら膝を着き、這うような姿勢で咳き込むヴァースの肩を内側から蹴り上げ仰向けに倒すとそのまま体重を掛けて踏みつける。
（……三つ、だったのか）
痛みで生理的に滲んだ涙でぼやける視界で、見上げたリンデンバウムの眼にも薄く魔術が掛っているのに今気が付いた。おそらくヴァースが視ている物と同じ、魔力の流れを見るための物。
「お前、何で発動前に俺の魔術が判った？　妖精の瞳（グラム・サイト）を使ってる訳でも無し」
ヴァースが自分と同じく妖精の瞳を使って魔力を見ているのならリンデンバウムにはそれが視える。間違いなく使っていない。
「勘じゃあないだろ？　お前の眼は間違いなく風の散刃（シェアシュナイデン）を見てたもんな？」
（良く、見てやがんな）
リンデンバウムの瞳に掛かった魔力さえ見落としていたヴァースとは対照的だ。深夜にこれだけ騒いで誰も来ないという事は予め結界でも敷かれていたか。だとすればまず助けは来るまい。

（終わったな）
さっさと一思いに殺ればいい。だというのに観察するようにヴァースを見下ろしたままリンデンバウムは動かない。
「お前、魔力が眼で視えるのか？　だとしたら面白いが……」
顔を近付け澄んだ紫の瞳を覗き込み、ほうと感嘆の息を吐くと手を伸ばして髪を梳く。
「凄いな。本当に金髪だ。……顔も綺麗なもんじゃないか」
言いながらついとなぞる指先に生まれた刃が軌跡の通りに頬に赤い筋を作っていく。
「素材としては面白いが、武術も魔術も楽しめるレベルじゃないな。――やっぱり、死ぬか？」
「……そのために来たんだろうが。テメェは」
ふいと顔を逸らしたヴァースの動きに合わせてさらりと髪が流れる。その下の耳に飾られたカフスを見て、驚いたようにリンデンバウムは目を見開いた。
「お前、これ……どこから手に入れた？」

1―4

「どうだっていっ、ぐっ」
言葉の途中で問答無用で殴られ続きは失われる。
「答えろ。これを持っていたのは十七ぐらいの赤毛のガキだろう」
「っ……？」
すぐさま脳裏に裏路地で助けた少年が思い浮かんで、それが表情に出てしまった。途端ぐっとヴァースの首を押さえつけるリンデンバウムの腕に力がこもる。
「どうやって手にした。そいつは今どうしてる！」
（何だ……？）
先程までは表情だけが病んだ笑みを造る無感情に等しいぐらいだったのに、今のリンデンバウムには明らかに感情があった。動向を気にする、という事は『探し人』とやらだろうか。
探し人、イコール殺す相手、だと思っていたのだがどう見てもそんな感じではない。
「答えろ」
「……何で盗ったみてェになってんだ。確かにテメェの言う通りこれは赤毛のガキの物だったよ。貰っただけだ」
「……」
じっとヴァースを観察しながら言葉を聞いて――ややあって僅かに力を抜く。勿論抜けられる程緩くはないが。
「そのようだな。お前はあまり嘘が上手くなさそうだ」
ゆっくりと手を伸ばし、再びリンデンバウムはヴァースの髪を弄う。
「ふぅん……イシュタルが、な……」
（イシュタル……）
流れからするにそれはあの少年の名前だろう。呟いた声にはやはり優しい響きがあって、こんな事をしていても人は人かと乾いた笑

いが込み上げてくる。
「基本的に俺は自分が殺す相手が大好きだ。俺に至上の快楽を与えてくれるからな」
「……一般的にそれは『好き』とは言わねえ」
「クク、そう言うな。それが性なんだ。愛情を識ってる俺が言ってるんだから俺の中では歪んでない。――別にただ殺すだけでもそれはそれで楽しいが」
先程イシュタルの名を出した時とは別人のようにリンデンバウムの表情は狂った愉悦に歪んでいる。表情筋だけを滑る、感情の見えない笑い方。
「折角なら、美味しくなるものはより美味しい状態で食べたいと思わないか？」
「……俺はさっさと楽に殺って欲しいんだが」
「それは有り得ないな。お前みたいな傷つけ甲斐のある綺麗な奴を短時間で失うのは勿体ない。ゆっくり声と顔は楽しませてもらうが」
くつくつと笑ってヴァースを見るリンデンバウムの眼はそこだけ本物の喜色が見て取れた。
――よりによって嫌な相手に捕まった。ヴァースの希望とこの男は正反対だ。
「――リンデンバウム。この名前に心当たりはないか」
「ある訳ねえだろ」
暗殺者の内でどれだけ有名だろうと知った事か。出来れば一生関わりたくないし、これからも出来る限り突っ込みたくない世界だ。
「個体名にはそりゃないだろうが『名前』を聞いた事はないのか？俺の仕事と併せて考えてみろ」
リンデンバウムは菩提樹の意を持つ。そしてその仕事はどう考えても暗殺だろう。
「――っ！」
思い当たるものが一つあって、ヴァースはぎょっとして眼を見開く。そのヴァースの反応に満足したようにリンデンバウムはゆった

りと頷いて見せた。
「そうだ。軍師一族シェアディールに飼われた護り樹だよ」
軍師一族シェアディール――与した側に必ず勝利をもたらすと言われる戦場の軍神。
彼等は決して利害では動かず、ただ民の声と己の正義に忠実で、故に権力者達から重用され、同時に恐れられている存在だった。
自然その命と知識は狙われる事が多く、その身を守る為に作り上げられるのが護り樹と呼ばれる人間の盾だった。
「この意味、判るな？」
「……シェアディールが、ヒルディアかシルギードについたのか……」
「そういう事だ」
ニィと毒々しい笑みを唇に浮かべリンデンバウムは肯定した。
――判っても構わないという事か。
「イシュタル・シェアディールを探せ、ヴァース・ファウストフィート。お前がカラムを守るにはそれしかない」
（イシュタル……あいつが、シェアディール……）
「お前は必ずこの町を守る」
「何……？」
確信したリンデンバウムの物言いに、当人であるヴァースの方が戸惑って聞き返した。当然だ。誠心誠意で守るつもりなどないと自分が一番判っている。
それを何故、会ったばかり――どころか殺しに来たような相手にそんな事を言われなくてはならないのか。
「折角だ。生きる為に足掻くお前を殺してみたい」
する、と首を押さえつけていた手を離すと、立ち上がって窓まで歩み寄り縁に手を掛けた。
「それまでその首、預けてやる」
ひゅっ、と腕を一閃して風を切るとそのまま窓から姿を消す。あぁ帰ったのかと床に転がったままぼんやりと頭が理解してからとっ

くに自由になっている体を起こした。
「……痛て」
そうして動き始めて、初めて自分の首が横一線に斬られているのに気が付いた。最後の風がそうだったのだろう。
「……馬鹿馬鹿しい」
シェアディールがどこに付こうがカラムがどうなろうが知った事か。
（守りたがってんのは俺じゃねえ）
ぴりとひり付く喉を押さえ、治癒魔術を掛けながら息を吐く。
（どうだっていいっつってんだろうが。別に……）

第二章　覚悟と理由と心の差

リンデンバウムの襲撃から一夜明け、首の傷も頬の傷も治癒術の力もあって塞がる事は塞がった。ただし痕まですっきり綺麗に治った、という訳ではなく一目でそれと知れてしまう。
純粋にヴァースの技量の問題である。
「ったく……顔に傷つけやがって。誤魔化しようがねえだろうが……」
転んだ、擦り剥いたと言うには真っ直ぐ鋭利に切られた傷跡。誰が見ても刃物か、それに準じるものだと判ってしまうだろう。
……鬱陶しい護衛だ何だが増えるかも知れない。
ヴァースを守ろうという気概は感じるが、何分実力は伴っていなかった。
カラムは無武装が原則なので軍隊というものは存在しない。自由都市の名の通り個人が技術を磨く事に対しての規制はないが都市としての武力はなく、また平和な町事情から個人技術も高いとは言い難い。せいぜい町のゴロツキを抑えるのには充分だねというレベル。町の治安もそういった一般市民の有志が自発的に守っていて、それで充分間に合ってきていたのだ。
――何にしてもこの城の中で一番腕が立つのがシアで次がヴァース本人という有様では、それら町の有志に期待するのも酷というもの。そんな護衛が何人付いてもその為に腕を磨いて送り込まれて来るプロフェッショナルな暗殺者を相手に何が出来る訳もない。
（見張られんなァ勘弁なんだがな）
少年期を過ぎ、母が死んでファウストフィートを出た辺りから人付き合いという人付き合いをしなくなったヴァースには慣れない人の気配というだけで気疲れするのだ、実は。
（しかしシェアディールか。元々勝ち目なんかねえ戦いだが、ますます逃げる手もねえな）

シェアディールはどちらに付いたのだろう。流石にそんな親切に教えてはくれなかったが。
（……つーか、イシュタルって『シェアディール』なんだろ。何でカラムなんかうろうろしてたんだ。野郎の言い様じゃイシュタルは引き込めそうな……ハッ、まさか）
誰が好き好んで一族同士で争いたいものか。
護り樹が付くのはシェアディールの当主だけなのでヴァースを殺そうとしている方が一族の意志だ。そんな中でイシュタルを引き込めるはずはないし――
（何で俺がんな事しなきゃならねェ）
自分には関係ない。関係ないのだ。
大体、そんな大きな力は持っていない。力が無いまま関わった所でどうしようもない現実を見せつけられるだけで――……
「――っ」
（馬鹿馬鹿しい！）
そこまで考えて、心の奥に沈めた澱が浮上しそうになってヴァースは無理やり思考を打ち切った。力があれば関わっていくとでも言うつもりか。
（冗談じゃねえ）
どうせ負ける戦い。関係など無いのだと何度も自分に言い聞かせる。
自分の手が及ばないものに心を寄せてはならない。それが叶わなかった時――傷付くのは自分なのだから。
その傷の痛みを知って、もう味わいたくないと思ったのだから――
コン、コン。
「！」
いつも通り、ここ最近ですっかり耳に馴染んだ規則的なリズムのノックにはっとして勢い良く顔を上げた。物思いに耽っていたせいの過剰な反応である。誰もいなくて良かった。
「ファウストフィート公。よろしいですか？」

「……ああ」
ここで嫌だと駄々を捏ねても傷跡が消えるまでの二、三日をシアと顔を合わせない訳にはいかない。そもそも怪しまれるだけだ。
（……大した事じゃねえんだし）
「失礼します」
後ろ手に扉を閉め、入って来たシアはヴァースを見るなり絶句した。
「ファウストフィート公、その傷……」
「見ての通り、大した事はねェ」
両方共殺す為に付けられた傷では無い。首元にあれば中々そうは見えないだろうがこちらの傷を付けられた時は、正真正銘殺意すらなかった。
「――昨夜、ですか？」
「ああ」
「……申し訳ございません」
ぐっと唇を噛み締め、悔恨の表情でシアは深く頭を下げた。
「別に、こうして何ともなってねえしな」
もしリンデンバウムが退いていなければ、今頃自分は見るに堪えない有様で発見されていた事だろう。その最中であればカラムやシアに呪いの言葉の一つでも吐いていたかもしれないが、無事だったのでそれも無い。
「いいえ！　私は貴方を守りきるつもりでカラムへ連れて来たのです！　……出来ると思っていました。なのに気が付きもしなかった……ッ」
固く握られた彼女の拳が震え、爪が食い込むのを半ば唖然とした気分でヴァースは見ていた。
――そこまで責任を感じられるとは思っていなかった。
せいぜい、手練れが来たならそれ相応の準備をしなくてはとか、その程度だと。
「止めろ。女に護られる程弱かねえし、傷付くのを見るのも気分の

良いものじゃねえ」
「ファウストフィート公……」
シアの手を取り指を解すと、微かに血が滲み傷となってしまった爪痕を癒す。
ヴァースに取られた手の居心地の悪さに、しかし決して優しく扱ってくれる男の手が嫌な訳でもなく、気恥ずかしさに頬を微かに染めながら治癒が終わるのを大人しく待つ。
ヴァースが手を離した後の行き場に困り、不自然にならないか心配しつつ体に寄せる。
――当のヴァースに他意はなく、気にもしなかったようだが。
「ありがとうございます」
自分を気遣ってくれた事に対して、生き残ってくれた事に対して、そしてこの場所を捨てないでくれた事に対しての、礼。
「けれど私が決めた事でしたから。貴方は必要な人だから」
「……」
「申し訳ありませんでした」
「……なあ、あんたは本当にこの町を守れるとか信じてるのか？」
時間稼ぎにはなった、確かに。だがそれは問題の解決にはならない。
いや、暗殺という手段にしろシェアディールはとにかく動き出して来た。時間稼ぎももう終わりだろう。今すぐにでも正面切った何かが起こってもおかしくない。
それに抗する策も武力も、何も持っていないというのに。
「そ、それは」
ヴァースの問いにシアは答えを返せなかった。
――そう、シアとて信じてはいないのだ。このまま誤魔化し、ヴァースを領主としてカラムを守っていけるだろうなどと、都合のいい事は。
「判りません。けれど終わった訳では無いんです。私は諦めたくありません！」

それでも現実に足掻き、戦おうとする彼女の必死の瞳に、見てしまった残酷な現実を突き付ける事は出来なかった。
「……頑張っても、無駄なんだよ」
知も武も敵わぬ相手と戦って、どう勝利を得ろと言うのだ。
その言葉を言えない代わりにいつも通りの悪態を吐くとヴァースはシアの横をすり抜け出て行った。
今日彼女が何も持ってきていないという事は昨日の書類の回収に来ただけだろう。サインは済ませて机の上に置いてある。
「……ファウストフィート公……？」
だが言葉には感情が滲み出る。形にならないその微小な違和感に戸惑いシアはヴァースの背を見送って――はたと気がつき慌ててその後を追った。
「ファウストフィート公！　どこへ！」
「昼には戻る。……好きにさせろ」
きっぱりとした拒絶の眼でヴァースに見られ、シアは伸ばし掛けた手を硬直させた。そのまま背を向け去っていくヴァースを追い掛けられもしない。
（……どうして）
彼の身ごなしから判断して、シアはヴァースの実力をほぼ正確に把握していた。彼が剣術・魔術の両方を扱う事は知っているが、それでも十分勝てるという自負がある。
そしてそれは間違っていない。
だというのに。
（……追えなかった）
彼の道を阻む事が出来なかった。美しい、しかし異形の紫の瞳に射竦められた途端に。
「ファウストフィート公……？」
今までヴァースは好意的ではなかったものの拒絶してはいなかったのだと思い知る。
ただそれだけで他人を圧倒する彼の瞳は――真実、王の物なのかも

しれない。
（けれど本人があれじゃあ……いえ、本人がああだからこそ、私は今恐ろしいんだ）

2―2

（ヒルディアとシルギードか）

中央広場の噴水の縁に腰掛け脚を組み、ヴァースはこの面倒の発端となった二つの国の名を思い浮かべる。

竜王国ヒルディア――大陸最古の大国であり、竜が棲むと言われる三方の山に周囲を囲われた女王国家。代々の女王はドラゴンマスターと呼ばれ山々に棲む何百という竜を操る事が出来るという。その力で太古の昔は大陸を制覇したとかいう歴史書もあるが、流石に眉唾だろう。現在は若干十三歳の少女が女王として君臨している。そして専制君主国家であるシルギード。山脈と草原からなる広大な地帯を根城にしていた多数の異民族達を平定して作られた多民族国家。現在は狂王と呼ばれる男が主として立ち、支配下に置かれた民族の多くに容赦のない圧政を敷いているという。

どちらに付くか、と二択しかなくなれば。

（……ヒルディアだろ）

町の人間が愛する『自由』が商売以外でどこまで残されるかは判らないが、まだヒルディアに組み込まれた方が安全だろう。

（今のうちにヒルディアに従った方が良いんじゃねえのか）

シアも市民達も望まないだろう。しかしどちらにしろいずれ戦禍に巻き込まれるのならばさっさと準備をして逃げておいた方がいいと思うのだ。

国境の町等というものが、いつまでも平和な訳はない。

被害を少なくするために――

「って！」

はたと考えるのを止めヴァースは頭を振る。何故こんな事を真面目に考えているのだ。

（だからっ。俺には関係ねーんだよッ）

シアや町の人間が決めた事に諾々と従ってやっていればいい。救

いたい奴だけ頑張っていればいい。
（クソ……ッ）
苛々と言う事を聞かない自分の思考に舌打ちをして頭を乱暴に掻く。
「――……何やってんだ。俺は」
昨日の今日でこんな所をフラフラと、いや、リンデンバウムはあのセリフからすればすぐにでも来るという事はないだろうが。
溜息をつき目線を何を見るでもなく遠くへと向けて――見覚えのある赤髪にはっとして身を乗り出す。
「イシュタル！」
「！」
名前を呼ばれ、明らかに驚いた様子でイシュタルは足を止めて振り向いて――ヴァースを認めると曖昧に笑ったような表情をする。
「ファウストフィート公」
「……まだうろうろしてたのか」
「まぁ。……驚きました。いつ判ったんです」
最初の驚きが去ると軽く目を細めて余裕を取り戻してからそう訊ねて来た。
「昨日だ。――リンデンバウムって知ってるか」
「――リンデンバウム、が」
「あァ。お陰で助かったぜ」
さらりと髪を掻き上げ耳のカフスと見せるとイシュタルはへえと感心した声を上げる。
「そうですか。それは良かった。――まさかリンデンバウムが来て更に生き残るとは思ってませんでしたけど。……そんな感じしないんですけどそこまで手練れなんですか？」
「テメェ失礼な事さらっと言ってくれんな」
昨日イシュタルはヴァースを評して『腕が立つ』と言ったがそれはあくまでも『一般の中で』という括りでの正確な評価だったらしい。

流石、軍師一族の名を冠するだけの事はあるという事か。戦力を見極める目は確からしい。
「……けど。リンデンバウムがどうしてファウストフィート公を……」
「ヒルディアだかシルギードだかにシェアディールが付いたからだろ。本人もそう言ってたんだから」
「まさか！　例えどっちがカラムを手にしたとしたってそれじゃあ確実に争いが起こる。姉上がそんな事をするはずがない！　付くんだったらカラムのはずだ」
　屈辱だとでも言いたげにイシュタルは眉を吊り上げきっぱりと否定してきた。盲目な程に。
「実際来てるんだから『はずはない』とは言えねえだろ」
「そ、れは」
　イシュタルの名前は、少し頑張れば調べられるだろうがリンデンバウムの名前が表に出る事はまず無い。
ヴァースがその名前に辿り着くには、やはりリンデンバウム自らが名乗るしかないだろう。
（けど、まさか……そんなはずは。それとも俺が見えていないだけなのか？）
　軍師一族などと言う血生臭い名前を背負ってはいるが、彼等には彼等の誇りがある。
シェアディールの知は理不尽な暴力に抗う術を持たない弱き民の為に存在する。だから決して、後に戦が起こったり民に苦行を強いるような策を取る事は無い。それを避けるための一族なのだから。
――だというのに、今イシュタルには当主である姉のやろうとしている事が見えなかった。
（今カラムがファウストフィートを失えば戦になる。大陸の抑止力としてのカラムの意味はとても大きい。なのに、何故……）
「イシュタル？」
「！」

ヴァースに呼び掛けられ、物思いから戻されてはっと顔を上げる。
「な――何でもありません。それより用はそれだけですか？　なら……」
「あぁ。――……い、や」
一回頷いてからヴァースは少し躊躇った後首を横に振った。
「一つ聞きたいんだが」
「カラムが生き残る方法ですか」
「……そうだ」
イシュタルにしてみればヴァースが問いかけて来るのに何の不思議もない質問。だがヴァース本人にとっては些か葛藤のある質問だった。
イシュタルの方もまだ先の事が後を引いていて気が付かれはしなかったが。
「一番はっきりしているのは貴方が死なない事です。ファウストフィートが生きてる限り手は出せない。後は結婚に注意すぐぐらいですかね。――でも……」
（姉上が動いてるんじゃ、そんな生温いままで済ませる訳がない）
「守ってるだけじゃ近い内に俺は殺られる」
結局一流の腕前を持つ者達に襲われれば、生き残るのは難しい。ヴァースが冷静に己の位置を見ているのに、イシュタルは少し驚いた。
「……俺がこの町に留まっている理由を聞いた時、貴方は昨日『必死だから』と答えました。現実に命が脅かされて尚、変わりませんか」
「そんなの就任前から判ってるだろうが」
「それはそうですが」
だが判っているだけの時と、実際に命の危機に晒された後では訳が違う。特にヴァースは今まで戦とも政治とも無関係な一般人だったのだ。覚悟が出来ているはずがない。
なのに。

「人の為に、命を掛けられるんですか。大義の為に？」
「……そんな綺麗なもんじゃねえ」
（無気力なだけだ。他人どころか、自分にまで）
微かに眼を曇らせたヴァースをしばし見詰めて――イシュタルはこくん、と頷いた。
「判った。俺が力を貸してやるよ、ファウストフィート公」
「――は？」
「俺がカラムに付いてやる。姉上が何を考えているか判るまで、だろうけどな」
イシュタルは姉が間違った判断をしているとは思っていない。当主の座を継いだ姉は、自分などよりも遥かに優秀で、強くて、正しい人だから。
だから間違っているなどとは絶対に思わないが――どうしても、今自分が納得出来なかった。
（中枢に入れば、俺にも視えるかも知れない）
現場にいれば姉の行動に納得できる何かがちゃんとあるのだ。それまで少し、カラムに時間を与えるぐらい許されるだろう。
「って……お前、いいのか」
「さっきも言ったろ。シェアディールが付くならカラムのはずだ。少なくとも俺ならそうする。だから理由が判るまでの間だけ」
「お前が信じる通りなら、お前の姉の策に乗ればカラムは助かる事になるんだろ。――俺が、死ねば」
「……」
例えファウストフィートを消すにしたって、ヴァースを退任ではなく、殺さなくてはならない理由……
（やっぱり、俺には判らない）
「それが一番だと思ったら、俺もそうする。けど今の俺には判らない。だから今はカラムに付く」
「――判った。頼む」
どちらにしろ盾になった段階でヴァースの命は長くなど無い。

（別に俺がカラムを守りたい訳じゃねえ）
だがシア達がカラムを守る為には――シェアディールの知があれば、きっと。
「じゃ、城に戻るか、ヴァース・ファウストフィート。あ、俺達との契約条件って衣食住と身の安全の保証だから。ま、カラムには『身の安全』はあんま期待しないけどそれなりには宜しくな」
「まあ、そりゃ多分俺と同じぐらいには――って、お前さっきから敬語取れてるぞ」
別に何としてでも敬語を使えという訳ではないが随分な変わりようだ。どちらかと言えば馴れ馴れしいし表情もどこか人を食った生意気なものになっている。おそらくこちらがイシュタルの素なのだろう。
「一般市民としちゃ領主のファウストフィート公には敬語使うけど、シェアディールの知が欲しいなら立場は対等だぜ、ヴァース。って事でよろしく」

2―3

「ふーはー。近くで見るとやっぱ凄いなぁ。カラムの財力の豊かさを感じるよなぁ」
ヴァースと共に城へと戻ってイシュタルは感心した口調でそう評価した。芸術性を優先した荘厳な城の造りはヒルディアやシルギードの王城と比べても遜色なく美しい。勿論規模まで、という訳にはいかないが。
外観だけでは無い。内装も手を抜かれておらず、それだけで一見の価値がある。
「でも所々趣味の悪いのがあるな」
「……あれは親父と兄貴の趣味だ」
その時ヴァースはまだ幼かったが父や兄がカラムの財力を使って片っ端から色々な物を購入しているのは知っていた。
とかく派手な物が好きで、それそのものが悪い訳ではないのだが並べられると趣味が悪く見える。センスの問題だろう。
「へえ。地位と品性ってのは比例しないもんだね。どれも悪い物じゃないのに勿体ない」
その通りだとは思うし血は繋がっていないとはいえ、人の家族を捕まえて随分な言いようだ。
……『家族』とは――言えないのだろうが。ヴァースとしても家族などとは思っていないのだし。
「――ファウストフィート公！　良かった、お帰りなさいませ」
どこかへ移動中だったのだろう、私室に戻る途中でばったり会ったシアからほっとしたように声を掛けられた。ヴァースの帰りがこう早いとは思っていなかったのだろう、表情が明らかにそれを言っている。
「……ええと。こちらの方は」
続いて見た事のない少年が一緒なのに気が付き戸惑った視線を向

けた。
カラムの人間では無い。――と思う。
見た事がないし、明らかな旅衣装は居住を持つ人間のそれでは無い。
という事は、シアから見るとヴァースが町で知り合い連れて来た、
という事になりそれは決して間違っていないのだが。
（……らしくない……）
ヴァースはカラムに出来る限り個人として付き合わないようにしている。シアの戸惑った視線を受け、ヴァース本人がどう言おうか、と迷っているうちにイシュタルが気さくに笑い掛けて来た。
「どうも初めまして。イシュタル・シェアディールだ。ヴァースに頼まれてカラムを守る手伝いをする事になったんで、以後よろしく」
「おいっ」
シェアディールの名前は伏せてた方が安全じゃないかとか色々考えていたのに、あっさりイシュタル自ら名乗ってしまった。
（――大体っ）
「俺がいつ頼んだ！　お前が気になったらからって言って来たんだろうが！」
「まあそれが第一だけど。『頼む』って言った。ヴァースも確かに『頼む』って言った」
「――っ」
言った。確かに言ったが――
「ファウストフィート公……？」
シアの声には露骨に驚きが滲み出ていた。
「――……貴方、が？」
「――っ。流れだ！　それから俺の為だッ」
お前等の為じゃない。町の為ではないと声を荒げてヴァースは否定するが動揺は全く隠せていない。
「何お前以外と照れ屋さん？　自分の命賭けて大した所縁がある訳でもない町をその住人が『頑張ってるから』なんて理由で守ってんだ。今更照れるような事じゃないだろ？」

「だ――からっ。違……っ」
そんな風に掻い摘んで言われると、もの凄く立派な人みたいだろう！
（そんなんじゃねえっ）
自分の中にあるのはそんな立派なものじゃない。無気力なのと――リンデンバウムに殺されるのは苦しいだろうから遠慮したいという、それだけだ。
「……ファウストフィート公」
（……知らなかった）
しくり、とシアは自分の胸が痛むのを感じた。
別にヴァースに不満は無かった。イシュタルの言う通り、ヴァースにとっては殆ど所縁の無い場所なのだから。
（居てくれるだけで充分だ、なんて）
何故居てくれるのかすら、見てもいなかったのに。
自分の命が然程惜しくないとか、それもきっと嘘じゃない。嘘じゃないだろうが――
それでここに居てくれた理由が、そんな事だったなんて。
ヴァースにとってはさしたる事ではないのだろう。
たまたま出来る事が目の前に転がっていたから、やった。きっとただそれだけの事で。
「――……ヴァース様」
「あ？」
「すみませんでした。そして――有難うございます」
そうシアは頭を下げ、初めて『ファウストフィート』の名前ではなくヴァース本人へと礼を告げた。
「止めろ。……んなんじゃねえ」
「まァいいじゃんいいじゃん。人の好意は貰っとくもんだ。お前がどう思ってても彼女はそれに感謝してる。それに実際町の為にもなる。悪い事なんて何も無いだろ？」
そう言って笑ったイシュタルの方が嬉しそうで、ヴァース本人は

首を傾げる。
「で、彼女は？」
促され、ようやくシアはイシュタルに名乗っていないのに気が付き頭を下げる。
「シア・ミディアラです。カラムの庶務全般を預かっています」
「そっか。じゃ、あんたにも来てもらった方が良いかな」
「？　どこにです？」
首を傾げるシアに代わってヴァースの方が頷いた。
「そうしてくれ。俺は政治にも何にも本当に関わってないから」
出来るならシアとイシュタルで話を進めて行って欲しいぐらいである。イシュタルに話を振った手前流石にそれはやらないが。
「忙しい？」
シアが腕に抱えたそれなりの量の書類を見てイシュタルはそう尋ねてみる。
「いえ、ご用が御有りでしたらそちらから伺いますが」
「ん、長くなるだろうからこっちが後でいい。纏まった時間が取れたらヴァースの部屋に来てくれ」
「判りました」
「じゃ。――行こう、ヴァース」
「ああ」
シアと別れ、後は擦れ違う人に会釈されるだけで三階の私室へ辿り着く。
「適当に座ってくれ」
「あぁ。――敵意じゃないけど一歩引かれてる感じだな。ま、ヴァースの容姿は綺麗だしちょっと委縮してんだろーな」
「とっつきづらいだけだろ」
そうして来たのがヴァースなのだから当然だ。だがくくと笑ってイシュタルはヴァースを指差した。
「お前は見栄えするよ、ヴァース。どこに出しても人目を引く気品がある。これは上に立つ者には重要なファクターだぞ」

「……そりゃ悪いよりゃいい方が良いだろうが」
そこまで言われると恥ずかしい。
――まあ、確かに義理の父や兄には女だったら、という事は散々言われた。その度に男に生まれた事に感謝したものだ。

2―4

「それで、これからどうするんだ」
自分の事はもういいとヴァースは先の事を尋ねて話題を変える。
「そうだな。まずは姉上がどこに付いてるのかを正確に知りたいな」
おそらくヒルディアだろうと思うのだが、カラムに付くはずだという予想を違えたばかりなので確かめてみないと言えなかった。
「それからなるべく早くヒルディアに行こう」
「ヒルディアに？」
「シルギードの傘下に入る気にはなれないだろ？　大体今のシルギードに聞く耳なんか無いし」
それはそうだとヴァースも思う。どちらかを選ぶというならヒルディアにするつもりだった。
だが――
「つまり自治は無理って事か？」
「まさか。カラムは『自由都市』だから価値がある、だろ？」
「けどヒルディアに行くんだろ？」
「そう。行くだけ。んで女王リエンと会って話して来る。それだけ」
「――は、ァ？」
確かに他の国の王と領主が会ってはならない決まりは無い。政治的、軍事的な話をする訳でもなければそれの干渉とは言わないだろうが。
「何かあったらヒルディアに付くぞ、っていう対外に対するアピールな」
「……成程」
ヴァースだけのみならず、今度はヒルディアをカラムそのものの盾として使う訳だ。
「でもそれだと喜び勇んでヒルディアから戦争仕掛けないか？　何かを起こせばカラムが自国に付くって判ったら」

「そう。だからヒルディア側にもそーゆーのは見せない」
付く気があるのかないのか、曖昧な所で濁すのだ。ただヴァースがこの状況でヒルディアを訪れる、それだけで十分意味がある。
「後――一番手っ取り早いのがお前が竜妃リエンを口説いてくる」
「……――はァ？」
にや、と人の悪い笑みを浮かべて言ったイシュタルにヴァースは驚愕の声を上げた。
「……今、なんつった」
「知らないのか？　リエンは美形の男が好きなんだよ。大丈夫お前顔綺麗だから。存分に使って取り入って来い」
「ふふふっ、ふざけんなっ！」
自分を身売りするような真似も勿論だが、それ以上にヴァースの倫理観が許さない。
「ヒルディアの女王は十三歳のガキだろうがっ！　そんな相手に何しろっつーんだ！」
「ナニまで出来りゃそりゃ完璧だな。そこまで気に入られりゃ間違いなく色々保証してくれる」
「真面目に考えろ少しは！」
「大真面目だ」
イシュタルの口調から話半分、冗談半分だと思っていたのだが、反して返って来たのは至極真面目な一言だった。
「別に体使えって訳じゃないが、リエンに認めさせる事は重要だ。――カラムが旨みを持った町に成長してからどれだけ経った。何故今まで食い物にされなかったと思ってる」
「何――って、条約があるからだろ」
目を瞬き、何を当然の事をとそう言ったヴァースにイシュタルは首を横に振る。
「違う。国同士の関係なんてそんな優しいもんじゃないぜ。大体その条件だけなら今だって何も変わってないだろ」
「そりゃそうだが……国力の問題とかか？」

元々のカラムの出来た理由だ。これは間違っていない。
「それもあるがそれだけじゃない。――そうだな。じゃあむしろ何で『今』なのかと言い換えた方が良いかな」
「今……」
「それはな、ヴァース。ファウストフィート公が変わったからだ」
「――？」
年を経れば代は替わる。それは当然の事だ。
それが理由だというならどうやっても避けられない事になるではないか。
「人が、じゃない。有り様が、だ。カラムは確かに条約に守られた都市だけど、それを守らせて来たのはファウストフィートだ。抜け道なんか突こうとすれば幾らでもあるんだから」
「……」
「今の代になってヒルディアとシルギードは動き出した。そしてファウストフィートは逃げてしまった」
二国の王の眼は正しかったと言える。今のファウストフィートには町を守る力どころか気概すらないと。
「すぐにでも動いてこないのはお前を見ているからだ。お前がどこまで出来る奴なのか」
「――……俺は」
そんな事、気にした事も無かった。元々ヴァースにカラムを守るつもりは無かったので当然だが――外から見ればそうなるだろう。
「……俺にだってそんな力はねえ」
「謀だけが領主じゃない。勿論出来るに越した事は無いけどそれより必要なのは人を信じさせる力だ。ついて行ってみようって、そう思わせる力。ヴァース、お前はその条件を満たしてる」
「……んな事、ねえだろ」
信じてどうする。自分などを。
「お前がそれを口にしちゃいけないんだよ、ヴァース・ファウストフィート。だって俺がこうしてカラムにいるだろ。お前にそんな事

言われたらシアだって、町の人間だってどうすりゃいいか判らなくなる」
「んな事ねェ！　俺はお前が思ってる程献身的な訳じゃない。ファウストフィートの座に居るのだってお前に声掛けたのだって誠心誠意町を守ろうとしてって訳じゃねェ！　そんな事シアだって町の人間だって判ってる！　俺が果たしてやんのは『盾』としての役割だけだ！」
一息に怒鳴ってはぁ、と息を付く。
怒るかもしれない、と思った。イシュタルが自分を聖人君子の様に見ていたなら裏切られた気分になるだろう。
だがイシュタルから返って来たのはごく冷静な言葉だった。
「そんな事判ってる。それで当たり前なんだ、ヴァース。人は厄介事なんて嫌がるものだから」
「だったら」
「でもお前はここに立ってる。町の人間達が一生懸命だからって、それだけの理由で個人を晒して命を掛けてる。リンデンバウムに言われたからかもしれないけど、それでもお前は俺に声を掛けたんだ」
「――……」
「力になってやろうって思ったんだろ」
ヴァースを見詰めるイシュタルの眼には優しい色が映っていた。敬意と憧れ、そんなような物に近い。
「シアはそれが嬉しかったんだ。城の人間だって同じだよ。ファウストフィートの名前じゃない。その名を持ってその場に立ってるヴァースへの好意だ」
「……っ……」

2―5

「――ヴァース、俺な、まだシェアディールじゃないんだ」
「？」
自分を嘲るように、情けない笑みを顔に張り付けてイシュタルはそう言った。
「最終試験、怖くなって逃げてきたんだ。一族から。人の命を預かるのが怖くて逃げたんだ。軍神なんて名前付けられて、期待されるのが怖かった」
（リンデンバウムがこいつを探してた理由はそれか……）
試験最中に逃げ出した事がシェアディールとしてどの程度責められる物なのかヴァースには想像つかないが、少なくともリンデンバウムが望んでいるのはイシュタルが咎を受ける事ではないだろう。イシュタルの安否を気遣った時にだけ見せた表情はおそらく本当のものだったから。
そしておそらく、当主だという姉も。血縁ならば飛び出して行方知れずになった弟がさぞかし心配だろう。
「笑えるよな。その為の知識も技術も、覚悟だって教わって来たのに肝心なものが何にも身に付いていなかったんだ」
「覚悟、か？」
それなら自分にだって無い。そう訊ねたヴァースにイシュタルは首を振って自分の胸を指す。
「心が」
「心？」
「シェアディールの知は理不尽な支配者に抗う術を持たない民の為にある。それは人が人を助けたいっていう、ちょっとした善意から生まれるものだ。――俺は自分の恐怖でそれを忘れて逃げたんだ。それをする為の全てを教わってたのに」
そしてもう自分には無理だとも思っていた。姉がもう継いでいる

んだから良いじゃないかとも思っていた。
（――そんな事じゃなかったのに）
そして逃げて、偶然立ち寄った町に知も力も術もないまま、それでも自分の命を晒して町と人とを守っている領主を知った。知も力も覚悟すらなくて、それでもほんの少しの善意で人の為に立ち上がっているひと。
何も持っていないのに、ほんの少しの善意の為に逃げなかったひと。
「お前のお陰で思い出した」
子供の頃、勉強の全てが好きだった。
自分達の力で本当に戦争を無くして行こうと三人で夢を笑って話し合った。
「だからカラムに力を貸そうと思ったんだ。――何よりも、お前の為に」
「って、殺すかも知れない相手に言うセリフじゃねェぞ」
「そうだな。――全くだよ」
だが本当に必要であるならば、シェアディールの誇りの為にイシュタルはやるつもりだった。個人の感情で全体を見失ってはいけないのだ。
「でもそれは最後だ。本当にどうしようもない以外は――俺は必ずお前を助けて見せる」
それほど真摯な思いを向けられても、応える事など出来ないというのに。言葉に詰まったヴァースを助けるように、静かに二回扉がノックされた。シアだ。
「ヴァース様、宜しいですか？」
「あ、あぁ！　大丈夫だ」
「失礼します」
妙に勢いが付いてしまったが、扉を開けて入って来たシアは然程気に止めていないようでほっとする。
「時間、もういいか？」
シアが訪れたという事はそうなのだろうと思いつつ、一応イシュ

タルはそう確認してみる。しかしシアから返って来たのは肯定では無く戸惑ったような表情。
「いえ、あの……シルギードから使者の方がいらっしゃってるんですが。ヴァース様に会いたいと。……お会いして頂いて宜しいですか？」
シアとしてはあまりヴァースに負担はかけたくないのだが、相手方がヴァースを望んでいる以上無視するのは蔑ろにしている事になってしまう。対外的にも良くない。
「……仕方ねえだろ。行――」
「冗談。ふざけるなって言って追い返せ」
『はぁ？』
きっぱりと言い放ったイシュタルにヴァースとシアは揃ってぎょっとした声を上げた。
「そ、そんな喧嘩を売る様な真似、出来る訳が」
「……お前等本っ当政略向かねーわ。いいから今日は追い返せ。絶対大丈夫だから。三日後ぐらいに出直してこいって言ってやれ」
「け、けど……」
シアは躊躇ったまま頷けない。
シェアディールだと名乗ってはいてもそもそもそれを証明するものなど何も無いのだ。会ったばかりのイシュタルを信用しろと言う方が無理がある。
「ヴァース」
イシュタルとてシアの心理は良く判る。だからこそ、その主であるヴァースに決断を求めた。
「……っ」
イシュタルから促され、ヴァースは小さく息を飲む。決定権を持つのは自分なのだ。
――イシュタルを連れて来たのは自分だ。
そして実際自分やシアよりは余程上手くやってくれるだろう。
「判った。シア、イシュタルに従ってくれ」

「――……判りました」
す、とヴァースに対して頭を下げ、それを伝えにだろう、シアは使者の元まで戻って行った。
「信じろ。大丈夫だから。軍神シェアディールの知の力、見せてやるからさ」
「俺がお前に声かけたんだ。お前の判断は信じる」
「あぁ、任せろ」
嬉しそうに笑って答えたイシュタルに、その知略への信用とは別問題でヴァースは心の内に不安が沈むのを感じていた。
（何をしてるんだ……俺は……）
一体自分は本当に、何をしているのだろう。
何の覚悟も、無いというのに。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8865w/

イデアール

2011年9月27日04時52分発行